

## アジアの高病原性PRRSの発症の特徴

2006年から2007年に中国で発生した高病原性のPRRSは、爆発的な形相を示し東南アジアに広がっていきました。しかしわずか2年後にも再び、またすさまじい発症が繰り返されました。その秘密を探るため、動衛研(農林水産省動物衛生研究所)の恒光裕先生らがJICA(海外協力隊)事業の一環としてベトナムで現地調査を行った結果、次のようなことが判ってきました。

- ① 中国やベトナムのほとんどの農場が小規模の庭先で、ごく小規模な養豚経営農家である。
- ② この菌株の病原性は凄まじく高く、ほとんどの豚が死亡してしまい、免疫を持った耐過豚がないに等しい状況となってしまった。
- ③ 2回目に若干変異をした株が侵入した際にも、全く初発と同様の発症が観察された。
- ④ 日本や韓国などはPRRSの汚染農場が多いので、ある程度の免疫が保持されている。そのため、仮にこうした毒性の高い株が侵入したとしても、東南アジアで発生したような発症形相は呈しないのではないか。
- ⑤ 検疫をすり抜けて豚を介してこうした毒性の高い株が国内に侵入する可能性は、非常に低い。むしろ物品類や人の方が心配である。

(出典:恒光氏のセミナーより)

海外からの新たな株の侵入について、国では物品類や人による伝播を心配していましたが、現在では豚だけではなく精液でも種畜の輸入は計られていますので、今まで以上の防疫体制を求めたい限りです。

国内に限っても株間の病原性の違いは調査されていないようですし、また世界レベルでも菌株間の相互作用などは一切わかってませんので、農場に存在する株の対処と、隣接農場、および食肉センターからの新たな株の導入をどう防ぐかがポイントとなると思います。

2011年1月 グローバルピッグファーム株式会社